

平成 26(2014)年度

NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2015 年 3 月 10 日
氏名	田中十紀恵
所属団体	特定非営利活動法人ムラのミライ
受入機関名（所在国）	SOMNEED Nepal（ネパール）
研修期間	2014 年 11 月 5 日～2015 年 3 月 10 日

研修テーマ	現場経験にもとづいた情報発信力の強化
全体研修目標	所属団体（NPO 法人ムラのミライ）が活動する地域のひとつである、ネパールでの実務研修を実施。 実務研修を通じて 1. プロジェクト実施におけるコアとなるコンセプト 2. プロジェクトの実施において必要とされる手法 3. プロジェクト運営の基本的な内容 について学び、当団体の活動の意義や強み・特徴を自身の経験から理解し、語ることができるようになる＝具体的で、説得力のあるメッセージの発信ができるようになることをめざす。

具体的な研修内容

所属団体がネパールでプロジェクトを実施するにあたって、活動コンセプトや手法を共有している現地パートナーNGO（SOMNEED Nepal）において、以下の実務研修を実施した。

1. プロジェクト実施におけるコアとなるコンセプトを学ぶ

目標

所属団体および受入機関が活動の中心に据えている「資源」「コミュニティ」「住民主体の活動」などが持つ意味・内容、それがどう現場で具体化されているのかを経験的に学ぶ。

研修内容

（1）受入機関によるモニタリング・調査・研修などに同行、業務を補助する。

（2014 年 11 月～2015 年 1 月）

- ・ 受入機関の活動を理解するための、オリエンテーション、資料閲覧、環境教育プログラムの体験
- ・ 受入機関によるモニタリング・調査・研修に同行し、運営の補助（写真記録など）

※一部「2. プロジェクトの実施において必要とされる手法を獲得する」の研修も兼ねる

2. プロジェクトの実施において必要とされる手法を獲得する

目標

所属団体および受入機関が共有する活動方法論（対話型ファシリテーション手法）が現場でいかに活用されているかを学ぶとともに、同手法の基礎的な考え方、スキルを身に付ける。

研修内容

（1）受入機関がプロジェクト対象地域の住民に対して実施する研修に同行、業務を補助する

(2015 年 1 月～3 月)

・プロジェクト対象地域の住民に対する研修の準備・実施の補助

(2) ネパールで活動する他団体(NGO 等) 事務所およびフィールドに訪問し、研修内容について他団体の取り組みの情報収集をおこなう(2014 年 11 月～2015 年 2 月)

【訪問先】

- ・(特活) AMDA 社会開発機構
- ・(特活) チャイルド・ファンド・ジャパンおよび現地提携団体のフィールド訪問
- ・(特活) ADRA Japan

3. プロジェクト運営の基本的な理解を養う

目標

プロジェクト全体の流れと日々の業務を体験し、今後の広報・支援者拡大活動において、プロジェクト運営と広報・支援者拡大の両方の視点から、現地駐在スタッフに対して適切な指示・研修がおこなえるようになる。

研修内容

- (1) 受入機関のプロジェクト運営に関する日々の業務を補助する(2014 年 11 月～2015 年 3 月)
- ・日々の進捗・予算管理の業務の補助
- ・ネパール国内の NGO 関連法制度に沿った計画・報告等の業務の補助

研修の成果

(目標に対し達成できなかった内容がある場合は、その理由とあわせて報告してください)

受入機関である SOMNEED Nepal は 2002 年に設立されて以来、カトマンズ盆地を拠点に、住民主体のコミュニティづくりに取り組んできた。現在はカトマンズ市内を流れるバグマティ川の水質汚染を改善するため、バグマティ川の中～上流地域に位置する学校や村において、

- (1) 小中学校での環境教育を通じた、コミュニティ単位で取り組む環境保全
- (2) コミュニティで維持・管理する分散型排水処理施設の建設

の 2 つのプロジェクトを所属団体(NPO 法人ムラのミライ)との協働にて実施している。

カトマンズ市内はここ 20 年で都市化が進み、人口が急激に増加している。しかし、こうした人口の急激な増加や都市化に伴う生活様式の変化にインフラ整備が追いつかず、家庭排水やゴミがそのままバグマティ川に捨てられている。家庭排水・ゴミの量が増えているだけではなく、その性質も合成洗剤やプラスチックへと変化している。このことから、下流地域では極端な汚染が進み、科学的数値から見ても生物が棲むことのできない状況である。また、中～上流地域でも汚染が徐々に進行している。バグマティ川上流は飲料水の水源としても活用されており、現在も水浴びや洗濯など川を生活用水として利用する人々も相当数存在している。将来にわたって川の環境を守り、水を利用し続けるためにも、進行する汚染を食い止めることが急務である。

こうした課題に対して、上記のとおり、主な川の汚染源は家庭排水やゴミであり、住民が汚染のメカニズムを理解し環境保全に取り組むことが効果的であると考え、学校やコミュニティを対象とした事業を実施している。これら事業について、研修期間に実施された活動(活動モニタリング、研修等)に同行し、業務の補助を通じて、以下の学びや成果があった。

1. プロジェクト実施におけるコアとなるコンセプトを学ぶ

所属団体および受入機関が活動の中心に据えている「資源」「コミュニティ」「住民主体の活動」が持つ意味・内容、それがどう現場で具体化されているのかを学ぶことができた。

たとえば、「資源」については、村の自然資源(土・水・森)を「コミュニティでの生活を支える／維持するもの」という視点から分析し、資源を消費するだけではなく、いかに守り、再生させることでコミュニティを維持・

管理していくかを住民が考えて実行することが、プロジェクト実施の基礎になっている。上記プロジェクトにおいては、実際にバグマティ川の上流から下流まで移動し、数地点でバグマティ川の汚染状況を科学的数値と、臭いや見た目、周囲の植生などさまざまな視点から観察し、「川が汚れている」が意味すること、それが自分たちの生活に与える影響を住民自身が考え、理解するトレーニングを実施している。環境教育のプロジェクトでは教員がそれぞれの学校で独自の活動を展開し始めている。今後は川を守り・再生していくために、個人の活動から「コミュニティ」が一体となって取り組めるアクションプランに落とし込む取り組みをおこなっていくこと予定している。

また、「住民主体の活動」については、研修等を通じて住民の自主性を強化し、「自分たちのプロジェクトである」というオーナーシップを醸成しながら、その意向を十分に尊重し、現実に合わせて対応することにポイントがある。上記プロジェクトでも、スタッフが「住民自身のプロジェクトである」という立場を徹底するようにしていることが見て取れた。支援する側が何もかも提案したり手を出すのではなく、住民からのアクションを待ちつつも、必要と思われるトレーニングを実施していた。また、それを実現するための手法も確立しており、プロジェクト担当スタッフによって活用されている。(詳しくは2. にて述べる)

これまでは、こうした活動コンセプトについて、レポートや報告書などの文字情報でしか得られなかったが、実際のプロジェクトの実施過程において、どのように具体化されているのかを学ぶことができた。

2. プロジェクトの実施において必要とされる手法を獲得する

上記のコンセプトを実現するための手法として、所属団体と受入機関は「対話型ファシリテーション手法」を共有し、プロジェクトを実施している。この手法では、支援する側がその地域が抱える課題を教え、解決方法を提案するのではなく、対話を通じて当事者が課題に気づき、解決のためにアクションを促すことをめざしている。支援が終了したあとも住民自らの手によって活動が継続されていくために最も効果的な方法だと考えるためである。

上記プロジェクトはこの手法に基づいて計画・実施されていると言える。本研修を通じて、どのような場面で対話型ファシリテーション手法が活用されているかを学ぶとともに、基礎的な考え方とスキルの獲得をめざした。

(1) 受入機関がプロジェクト対象地域の住民に対して実施する研修に同行、業務を補助することを通じて、以下の点について学ぶことができた。

①コミュニケーションスキル

所属団体ないし受入機関においては、プロジェクト実施のすべてのプロセスにおいて、外部者(NGO・援助機関スタッフ)と住民とのあいだの「思い込み」を排したやりとりを避けるために、具体的な事実を丁寧に聞いていく／あるいは事実を確認していくことを重視している。また、「80歳のお年寄りにも10歳の子どもにもわかるように話す」に表されるように、抽象的な言葉を使うのではなく、住民たちの生活に密着した、わかりやすい例えを使いながら話をしていくよう留意している(これは、スタッフがその言葉の意味するところを理解していなければならないことである)。

こうしたコミュニケーション手法は住民へのインタビューでも活用されており、「自分ならどう質問をするか、どう話していくか」を考えながら、実際の住民とのやり取りを見て学ぶことができた。自身が住民に質問する機会があったときや、スタッフとの日々のコミュニケーションにおいて、実践してみたが、話を意図したように引き出すことは難しく、手法の獲得まで達成できたとは言い難いが、今後はさまざまな場面で実践していくことで、さらにスキルアップを図りたい。

②オーナーシップ醸成のための取り組み

すでに上記のプロジェクト開始から2年経っており、住民のなかで、ある程度は「自分たちのプロジェクトである」という意識が醸成され、それが伺える発言も見られるようになっていた。そのため、本研修期間中は住民による自主的な活動をサポートしていくことが主であった。

たとえば、排水処理施設建設のプロジェクトでは、建設前に予算やスケジュール、建設に投入する資材、人材を記載したアクションプラン(ネパール語のもの)を対象地域の全世帯に配布し、いつでも住民からの質問に答えられるような体制をつくった。建設終了後は実際のコストを住民と共有している。

また、施設をコミュニティで維持・管理することを考えるにあたって、ハード建設のプロジェクトでは往々にして起こっていることであるが、仕組みやコストを住民自身が理解していなければ、故障や不具合が生じた時に修理されず、放置され使われなくなる。そこで、設計した業者から共有されたマニュアル(英語)の内容について、まずは受入機関スタッフが現場で一つ一つ作業工程について確認、専門家でなくとも理解できるような表現、施設の実態に合わせた作業項目の追加・修正を加えていった。今後、修正・追加したマニュアルをネパール語に翻訳し、維持・管理のための住民組織の役員に対する研修(各作業工程を現場で確認する)を実施、メンテナンスに必要な人員や報酬を彼ら自身が考え、実行していくようサポートする予定である。

支援が終了したあとも住民自身による活動が継続されていくためには、こうした活動のコストを理解することが肝要であると考えている。単に住民からのコンタクトを待つのではなく、受入機関スタッフ自身が維持・管理に必要な作業やコストをまずは理解し、住民に対して考えるための枠組みを提供するなど、必要なサポートをおこなっている。このような手法が取り入れられている活動に携わり、留意すべきポイントや実施のプロセスを学ぶことができた。

(2) ネパールで活動する他団体(NGO等)事務所およびフィールドに訪問し、研修内容について他団体の取り組みの情報収集をおこなった。

日本に本部を置く3団体((特活)AMDA社会開発機構、(特活)チャイルド・ファンド・ジャパン、(特活)ADRA Japan)およびその現地パートナーNGOに、事務所訪問およびフィールド訪問を受け入れていただいた。

- ・ネパールで実施している活動全般について
- ・現地パートナーNGOとの活動のようす

などについてお話を伺うことができた。それぞれ異なる課題に対して取り組まれており、ネパールでのNGOの活動について幅広い情報収集ができた。

当会では2000年代初頭から、海外の現場においてカウンターパート方式ではなく、直接オペレーション方式(当会からスタッフを恒常的に活動現場に配置し、現地パートナーNGOとともにプロジェクトを実施)に切り替えた。こうした環境が当会と現地パートナーNGOとのあいだでの手法の共有を可能にしており、当会の特徴の一つであると感じた。一方、ヒアリングでは、遠隔地におけるプロジェクトでは現地パートナーNGOとの直接のやり取りに限られるなかで、スタッフが現場に赴いて現地パートナーNGOスタッフへの研修をおこなうなど、地域の人と日々接する現地パートナーNGOスタッフへの能力強化への取り組みを学ぶことができた。

また、訪問先にて、当会のファシリテーション手法(現地住民とのコミュニケーション等)は書籍や研修等を通じて認知されており、相互に学びあうことが可能であることも感じた。現場レベルでの経験共有や情報交換を進めることで、個人のスキルアップにとどまらず、当会を含むNGO間での手法の共有、団体としての底上げにつながるのではないだろうか。

3. プロジェクト運営の基本的な理解を養う

プロジェクト運営と広報・支援者拡大の両方の視点から、現地駐在スタッフに対して適切な指示・研修がおこなえるようになることをめざした。

プロジェクト運営において必要とされる業務（日々の予算・進捗管理、スケジュールや活動内容の軌道修正）一連の流れを学ぶことができた。また、ネパール国内での NGO 関連法制度に基づいた報告・評価の準備についても学ぶことができた。

一方で、国内事業に従事しているときよりも、支援者との直接のやり取りが少ないなかで、駐在スタッフが自主的に国内での事業向けに情報を蓄積・加工していくことの難しさも実感した。こうした経験をもって、当会の現地駐在スタッフに対してきめ細かな指示・研修が行えるようになることが今後の課題である。

4. 全体として

所属団体では、現場での活動の蓄積をウェブコンテンツや書籍、研修というかたちで積極的に発信しており、団体内でどんな役割を担うスタッフでも、自身の経験から活動の特徴や強みを語ることができるようになることをめざしている。今回、本研修に参加し、数か月にわたって現場での実務研修をおこなったことにより「現場で起こっていること」をスポットで学ぶのではなく、ある程度の流れをもって活動の経過を追いながら学び、経験する貴重な機会となった。今後は本研修での学びと経験を言語化し、国内事業や支援者拡大に活かしていきたい。

本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法

1. ネパールでの活動をベースにした、研修プログラム・スタディツアー等の企画・運営

本研修をとおして、当会の場合は、現場で起こっていることや住民とのやりとりを余すところなく蓄積し、関心層に伝えていくことが組織強化につながると確信できた。これまで当会では、日本とインドでの研修プログラムやスタディツアーの提供を通じて、対話型ファシリテーション手法を共有してきたが、ネパールでの活動を題材にしたものは、現地駐在スタッフが執筆するプロジェクト報告などにとどまっていた。今後、本研修で獲得した学びを活かして、ネパールの活動をベースとした研修プログラムやスタディツアー等の企画・運営を提案していきたい。こうした活動が自団体の組織強化のみならず、国際協力／NGO セクターへの研修成果の還元につながると考えている。

2. 海外オフィスと支援者をつなぐ取り組み

国内オフィスに勤務していると、支援者や団体への関心層と接する機会が多く、そこから得られた声が、次の情報発信や企画へのモチベーションにつながる。海外オフィスではそうした直接のやり取りの機会が少なくなるため、きめ細かにフィードバックを送るなど、当会の海外駐在スタッフと支援者をつなぐ取り組みを行いたい。

本プログラムや事務局側に対する提案、要望等

本プログラムについて、現場で学ぶとても貴重な機会をいただいたことに感謝しています。事務局においては、渡航前から研修期間中、研修終了時まで、こちらの意向をくんだアドバイスやサポートをしていただき、本当にありがとうございました。

一方で、2014 年度の募集スケジュール（年度始めに募集・選考）での実施の場合、最長 6 か月間の研修受講が可能といえども、受入機関との調整や、所属団体での業務引き継ぎにも時間が必要になるため、6 ヶ月間をフルに使うのは難しいと感じました。2015 年度募集のように、参加者募集を前年度から開始されれば、参加を検討している層も、次年度計画の段階で所属団体と業務の調整をすることができるので、より参加しやすくなるのではないかと考えています。

以上

その他

(総合的に研修成果を理解するために、写真類、研修員が受入先機関に提出した報告書類等があれば、あわせて添付願います)



川や路上に捨てられたゴミ (プロジェクト実施地域周辺)



バグマティ川の観察 (上流)



バグマティ川の観察 (下流)



訪日プログラム参加者による報告会



環境教育のトレーニングを受けた教員による活動のようす





プロジェクト実施地域周辺の川の様子



分散型排水処理施設（DEWATS）建設



分散型排水処理施設（DEWATS）建設



メンテナンスマニュアルづくりの様子